

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：32406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00689

研究課題名(和文) 周辺の現象をもたらす規則に関する日英語対照研究

研究課題名(英文) A Contrastive Study in Japanese and English on the Rules Giving Rise to Peripheral Phenomena

研究代表者

大澤 舞 (Osawa, Mai)

獨協大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70610830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最終的な目的は、中核的現象を基本としたときに、周辺の現象がどのように生じるのかを文法と文脈の関係から明らかにすることであった。その最終目的に向けて、当時周辺の現象であると考えられていた日本語の直接引用複合語の性質を記述することに焦点をおいた。日英語の直接引用複合語ともに、把握した事態の抽象化の手間を省くことができるエコな表現であるといえる。さらに、ここ数年で直接引用複合語の諸相、特に生産性の高さに変化が見られることが指摘できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

直接引用複合語は、引用部が表す説明的内容を抽象化して上位概念を表す名詞句を用いて、ある意味客観的に表現する代わりに、その抽象化の手間を省いて、発話をそのまま引用することで事態を見たま、感じたままに表出できる形式である。それは同時に、聞き手に抽象化された名詞句であれば可能であった様々な読み込みの余地を狭める表現であるともいえる。この点から、SNSでの文字情報のみのコミュニケーションにおける誤解や憶測を互いに避けるために適した表現形式であるともいえ、現象の記述や機能的分析のみではとどまらず、例えば、社会学的観点などからの分析をも可能にする研究であるといえる。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to clarify how marked phenomena arise from the relationship between grammar and context, when unmarked phenomena are taken as the basis. Towards this end, the study focused on describing the nature of directly speech compounds in Japanese, which were considered peripheral phenomena when the study began. Both Japanese direct speech compounds and English direct speech compounds are eco-friendly expressions that save the time and effort of abstracting the grasped situation. Furthermore, it can be noted that in the last few years there has been a change in various aspects of direct speech compounds, especially in its productivity.

研究分野：英語学

キーワード：周辺の現象 直接引用複合語 語用論

1. 研究開始当初の背景

いわゆる文法的といわれる構文や Quirk et al. (1985), Huddleston and Pullum (2002) や Swan (1980, 2005) などの文法書が取り上げるような規範的な文や表現に見られる現象を中核的な現象としたとき、中核の規則から逸脱している例外的現象も、言語事実として存在する以上は、当該言語の話者がもつ文法知識に周辺部として含まれる。よって、例外的事実は文法研究の説明対象から除外されるべきではなく、むしろ重要な説明対象とされるべきである。事実、周辺の現象に焦点をあてた研究が存在する。国内では、渋谷 (1997), 天野 (2002), 影山 (2009), Osawa (2009) などが、また国外では、Taylor (1994) や Bresnan (2005) などの先行研究が、「単独では容認されないが、ある適切な文脈においては容認される構文」があるという言語事実を指摘している。また、廣瀬 (2006) の「英語における日記文の主語省略」、佐野 (2012) の「さ入れ言葉」、今野 (2012) の「イ落ち」や尾谷・二枝 (2011) における「を入れ言葉」などのように個別の周辺の現象を扱っている先行研究がある。

梶田 (1984) が指摘しているように、中核のみあるいは周辺のみ偏った研究では十分とはいえない。周辺の現象に位置づけられる構文は、中核的な規則から逸脱しているが故に「普通」とは違うその奇異な形式や性質が目を引き、各構文の詳細な記述研究が行われやすい。各構文の記述研究は、新たな言語事実を提示するという点においては意義あるものだといえる。しかし、周辺の現象の特異性に注目しているだけでは、依然として周辺の現象は単なる例外として個別に扱われてしまい、中核的現象とどのように関わっているのかは不明のままである。

中核的現象と周辺の現象の関係に関する研究も最近は行われるようになったが、ほとんどが、両現象がどのような関係にあるのかを十分明らかにしているとはいえない。大室 (2018) は梶田 (1984, 2004) の議論を根底に、文法規則がより中核的な構文からより周辺の構文へと広がる連続的なものであると述べ、様々な英語の構文において、基本形とその基本形から生まれた変種があることを指摘している。しかし、そのような指摘をするにとどまっている。また、大澤 (2017) は中核的現象と周辺の現象が示す相関には2種類あることを指摘している。しかし、分類するにとどまり、具体的にその分類がどのような意味をもつのかまでは論じていない。

以上のような現状から、中核的現象と周辺の現象の関係、特に、周辺の現象が生じるメカニズムを明らかにすることが求められるといえる。そして、その関係・メカニズムを明らかにすることが言語学領域においてどのような意義をもつのかということを考えてゆく必要がある。

2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、中核的現象を基本としたときに、周辺の現象がどのように生じるのかを文法と文脈の関係から明らかにすることである。この最終目的に至る段階目的が以下3点である。

- (1) 英語の direct speech compound (直接引用複合語) の性質を記述し、その意味・語用論的機能に関する一般化を提案する。
- (2) 日本語の直接引用複合語の性質を記述し、その意味・語用論的機能に関する一般化を提案する。特に、「X みたいな NP」や「X 的な NP」との比較を通して、日英語における複合語の前項に直接引用形式を用いることの動機を明らかにする。
- (3) 日英語の直接引用複合語に関する一般化の妥当性を検証し、その他の周辺の現象を含めて統一的に分析する。

3. 研究の方法

大きく3つの段階を設定する。

- (1) 日英語の直接引用複合語 (例: *Honey, I' m home happiness* / なんだ、良いやつじゃないか! 案件) を詳細に記述し、その意味・語用論的機能に関する一般化を提案する。
 - ① インターネットやコーパスからデータを収集し言語事実を精査する。また、先行研究 (Pascual et al. 2013, 新屋・東條 2013 など) の問題点を指摘し提案を提示する。
 - ② 英語の direct speech compound, 日本語の直接引用複合語の共通点と相違点を分類し、共通点を元に、直接引用複合語に関する記述的一般化を提案する。また、相違点に関して、それが各言語体系のどこから生じるのかを分析する。
- (2) 直接引用形式と一般名詞との比較を行い、複合語の前項に直接引用形式を用いる動機を明らかにする。
- (3) 他の周辺の現象を含め、記述的研究と理論的研究からの統一的な説明を試みる。段階(1)と(2)の成果と、本研究課題より前までに明らかにしてきた「重複可能表現 (跳べることができる)」や「cause 使役受身 (*Priced were caused to rise.)」を「周辺の現象」として統一的に扱う。特に、① 中核的現象と周辺の現象の関連と、② 周辺の現象が生じるメカニズムという2点について、理論言語学者との共同研究を行い、記述と理論の両面から説明する。

4. 研究成果

本研究の成果として、(1)日本語の直接引用複合語の語用論的機能に関する仮説の提示、(2)先行研究の問題点の指摘、そして(3)今後の研究へのつながりの提示という3点が挙げられる。

(1)「なんだ、良いやつじゃないか！案件」のような直接引用複合語と「思ったより良い人みたいな事(事実)」のような「XみたいなNP」という表現との比較を行った。名詞(句)は細部が捨象されて抽象化されているために、話者の表したい事実や事態を事細かに時制を伴って表すことができないのと同時に、聞き手がその名詞にまつわる情報を読み込み過ぎる余地をもつともいえる。一方、直接引用は、事実・事態をそのまま時制を含みながら表すために、文字数は多くなるが、見たままや感じたままを述べるということから、同じことの上位概念を表し抽象化する名詞(句)に言い換える必要がないという点では「エコ」な表現であるといえる。また、発話を忠実に引用するため、聞き手の勝手な解釈の余地は狭まる。例えば、「なんだ、良いやつじゃないか！」という直接引用を名詞句で表す場合には「思ったより良い人」などのような表現になるが、発話や感情(吐露)をそのまま引用することで、わざわざ名詞(句)に言い換える手間を省くことができる。ここに「名詞名詞複合語」ではなく、「直接引用複合語」を用いる動機があると考え、「直接引用複合語は、抽象化の手間を省き、発話をそのまま用いることで、話者のより直接的な感情吐露を表す機能をもつ」という仮説をまとめた。

(2)日本語の直接引用複合語の(当時)唯一と思われる先行研究である新屋・東條(2013)は、「(直接引用形式)状態」という表現が、奥津(1975)による複合名詞5類型のどれにも該当せず、そして、野村(1977)による複合名詞構成パターン6類15種のどれにも該当しないということから、「(直接引用形式)状態」という表現が破格の複合名詞であると指摘している。また、「～状態」という直接引用複合語は多く観察されるが、例えば『犬だつて家族だもんね！運動』や『二千億年金溶かしちゃった問題』はタイトルやキャッチフレーズとしての慣用表現であり、今のところ用法は限定されている(新屋・東條(2013:45))と述べている。このことから、本研究では、直接引用複合語が日本語の周辺的現象といえるのかどうか、もし言えるのであれば対応する中核的現象との位置付けはどのようなものかを明らかにしようとした。さらに、日本語の直接引用複合語が作られにくいのだとしたら、同じような英語のdirect speech compoundは、後部要素となる名詞も種々様々で特定の表現には限定されず、前部要素となる直接引用部分にも制限がない(cf. Pascual et al. (2013))ように、その生産性に日英語で差がみられることになる。しかし、数年の研究中断を経て再開した際に改めてデータ収集を行うと、諸相が変わってきたことが見てとれた。「～状態」や「～案件」以外にも「～態度(仕事でがんばってますけど態度)」「～目線(お前こんなことも知らなかったら、おとなになったら困るんやぞ目線)」「～問題(ああアートね問題)」「～飲み会(みんなでガヤガヤしようぜ飲み会)」「～顔(私やってません顔)」など、非常に自由な形で用いられており、枚挙にいとまがない。

(3)新屋・東條(2013:37)は、『(直接引用形式)状態』の前項は名詞、副詞、形容詞語幹、動詞+助動詞/接辞のいずれにも該当しないと述べているが、直接引用形式は、コンピュータの「だ」に直接つなげることができ(A: 以上です。B: なにが以上ですだよ。/気をつけなきゃですね)、また、格助詞をつけることができる(男性の幸せにしますは当てにならない。/やらなきゃが多すぎて疲れちゃう)。この点からは直接引用が名詞的に捉えられていると考えることができる。さらには、複合語だけではなく、本来であれば名詞や形容動詞などが用いられるところに直接引用が用いられている表現も多くみられる(それはもう俺じゃない！まである/お前にかんげーねーだろ？/しかない/そんな歳の子一人で行かせたらあかんやろでしかない)。このような直接引用を用いた表現の生産性の高さから、対応する上位概念や抽象概念を表す名詞一語に置き換える手間を回避して、直接引用を名詞の代わりに(もしくは、名詞的に)用いることで、思ったまま、見たままに表現することができるといえる。直接引用複合語と直接引用を用いた表現とを合わせて扱うことで、直接引用複合語の語用論的機能に関する仮説の妥当性を示すことができると示唆される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大澤 舞	4. 巻 1
2. 論文標題 英語のとりたて表現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語と世界の言語のとりたて表現	6. 最初と最後の頁 257-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大澤 舞
2. 発表標題 日英語の直接引用複合語について
3. 学会等名 第6回筑波英語学若手研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大澤 舞
2. 発表標題 just because主語構文の日英語対照からみる形態的有形性の相違点
3. 学会等名 第11回筑波英語学会若手研究会（第2部）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap
<https://researchmap.jp/1062>
獨協大学教員研究業績
<https://www.dokkyo.ac.jp/research/faculty/perform/16132064/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------